

東南アジア華人移民の歴史およびマレーシアと インドネシアにおける華人移民の適応パターン

合 田 美 穂

A Historical Study of the Patterns of Adaptation of Overseas Chinese in Malaysia and Indonesia

GODA Miho

Abstract : This historical and socio-cultural study investigates the complicated relationship between overseas Chinese and the natives in South-East Asia, using Chinese minorities (such as Kapitan in Malaysia, Chukong in Indonesia and pure-blooded Chinese in Indonesia) and mixed-blooded communities (such as in Peranakan in Malaysia and Indonesia) as examples to show different patterns of national and cultural adaptation and acculturation. From documents, we can see that the Chinese minority culture and society have developed in accordance with changes within Malaysia and Indonesia and the outside world. Due to interactions with other groups, either inside or outside Malaysia and Indonesia, the Chinese minority, which has its special characteristics, has undergone specific changes.

1. はじめに：研究課題および研究方法

海外華人にかんする研究を始めてから、海外に居住する華人と親しくなると、必ず「あなたは移民第何世代ですか？」と質問するようにしている。シンガポールでは、50～60代の華人の場合、祖父の世代、あるいは父母が幼少時に移民してきたと答える人が最も多い。20代以下になると、祖父の時代であったか、父母の時代であったかはっきり答えられない人さえもいる。中には、祖先が直接中国からではなく、マレーシアやインドネシアを経由してシンガポールに定住したとか、祖先が東南アジア華人であったのが、新中国の建設とともに中国に戻った後、文化大革命を機に逆流してきたケースや、親が国民党の残留勢力として、1950年代に海外へ渡ってきたというケースもあった。また、「曾祖父はマレー系女性と通婚し、親や親戚もそういうもの同士で通婚しているため、家の中ではずっとマレー語や英語しか使わないし、あまりチャイニーズとしての意識もない」という混血華人もいた。10

年ほど前までのシンガポールでは、このような返答が大半を占めていたのが、近年では、本人が第1世代の移民であると答える「新移民」も数多く見られるようになってきている。

海外華人はさまざまな要因によって海外へ移民し、居住国において、それぞれ異なった背景と環境の中で、一時または長期滞在、あるいは場合によって永住することになった。そして、華人の移民の過程で、現地人との通婚によって混血児およびその文化が生まれた。また、一部の華人は、土着の支配者あるいは時の政治家に重用あるいは利用され、現地華人社会を統制する任務にも任命されたり、経済を支配するに至ったり、ということもあった。このように、何らかの形で、現地の他民族とかかわりながら、現地に根を下ろす華人がいるのと同時に、現地社会の中に同化せず、華人コミュニティを築いて平和的に共存している華人も存在している。過去には、華人にとって不幸な事件もしばしば起こっており、とりわけ、近代では、多くの華人が居住国へ同化を強制されたり、他民族との軋轢などによって、種族暴動や排華運動が発生し、

多数の華人が排斥されたり、華人の経済活動や教育活動に制限が加えられたり、ということは少なくなかった。

本研究は、以下にのべる4点について考察することを目的としている：1点目は、海外華人移民が生まれることとなった歴史的背景、2点目は、海外華人移民の種類、3点目は、華人の居住国における適応パターンである。これらの問題について考察を行い、比較する事によって、複雑化された華人社会についての理解を深めることが本研究の目的である。

本研究に用いた研究方法は以下の4点である：1点目は、歴史的文献および先行研究、2点目は、雑誌、新聞などの報道、3点目は、東南アジア華人による手記を含めた自伝的記述、4点目は、東南アジア華人を主とする関係者への聞き取りである。なお、本研究では、華人と土着住民との相互利用の代表例として、マレーシアの「カピタン」およびインドネシアの「チュコン」を、同化の代表例として、マレーシアやインドネシアに多く見られる「ペラナカン（ババ、ニョニャ）」と呼ばれる混血華人を、「歴史の副産物」という見地から選択した。また、居住国における共生（非同化）の例として、「保守」的な立場から、「排斥」される立場へ、そして、現在は「承認」されるようになったインドネシア華人（純血華人）を選択した¹。

2. 海外華人の歴史

2-1. 16世紀以前：中国海軍の成長および海上貿易の発展

海外華人は、どのような過程で生まれたのだろうか。多くの海外華人を生み出すことになった歴史的背景には、中国海軍の成長および海上貿易の発展、中国と東南アジアの相互作用、中国国内の人口増加、西洋の軍事および商工業の拡大をはじめとする全世界的動き、それにつながる動きとして、西洋の中国および東南アジアに対する影響、中国内部の崩壊、そして、近年における東南アジアでの熟練動労者の需要があげられる。

16世紀以前の中国人の移民は、商業目的による外国との往來の過程で生まれたものであった。中国の海上貿易は主に南洋（東南アジア）からの特産物の輸入によるものであった。特に、1127年に南宋が成立したことによって始まった中国の航海時代では、南洋との「朝貢」の形式を取らない貿易が全盛期を極め、南宋政府は商港を建設するための海軍をも組織した。当

時、危険を冒して海や陸に行く商人が後を絶たず、特に、泉州（福建省）からの商人は、現地で冬を越すようになり、中には滞在期間が10年にまでおよぶものや、現地に移民するものまでもいた。こういった状況は、元朝以降も続いた。明朝以降は、歴代皇帝がさほど南洋貿易に興味を示さなかった中で、明初の永楽帝が70回以上も使節を派遣し、積極的に南洋との商業をベースとした交流をすすめたため、その時期、ジャワやスマトラに華人や混血華人が居住する強大な華人商業地区が作られた。

2-2. 16～19世紀：中国と東南アジアの相互作用、西洋の軍事および商工業の拡大をはじめとする全世界的動き

この時期、東南アジアへのヨーロッパの進出がめざましく、多くの商業をベースにした移民が東南アジアへ渡った。16世紀、中国の社会構造は変化を見せ、中国社会は、過去のどの時期よりも市場経済によって大きな影響を受けるようになった。農業は商業化し、都市部の工芸品生産は拡大し、貿易とその競争力が増加したことから、社会の流動性も加速した。それは、明政府の経済に対する管制が厳しくなかったためである。その中で、福建人による非常に大きい商業勢力が形成され、東アジアおよび東南アジアとの貿易の仲介を行うようになった。彼らの中で突出していたのが、鄭芝龍とその子で台湾を統轄したことで知られる鄭成功である。

17世紀には、オランダ人やイギリス人が東南アジアに進出すると同時に、多くの華人がタイ、ベトナム、カンボジアやフィリピンなどに華人植民区を形成した。1644年に、清政府による統治が始まると、清政府が、反清を唱える鄭成功による沿海貿易を封じるため、沿海住民を内陸部に移民させ、海上貿易を禁止した。清政府の迫害によって、鄭成功の残留勢力はベトナム南部に流れ、地方の統治者となった。一方、満州族の統治に不満を持つ多くの人びともインドシナ半島に渡り、ベトナム南部やカンボジアでは半島南部では華人による巨大な勢力が形成された。これは、商業ベースとは異なるもうひとつの移民の流れである。

華人と東南アジアとの貿易は、政府の管制などから、多くの困難に直面していたが、18世紀以降、更に多くの華人が東南アジアに渡った。当時は、商業ベースのほかに、「苦力」とよばれる非熟練労働者が多量に発生し、その中には、渡航費用を借金して渡ったもの、騙されて連行されたものなどもいた。その背景

には、土着の統治者や西洋の植民者が華人を利用してあげられる。「苦力」の多くは地縁や血縁などによる連鎖移民であり、ベトナム、タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシアなどを中心とした地域に渡り、方言群による住み分けを行った。その後、華人居住地は更に拡大し、華人が現地の貿易をコントロールするようにならなっていた。

2-3. 19世紀以降：西洋の中国および東南アジアに対する影響、中国内部の崩壊

19世紀以降、植民地政府の統治下にある東南アジアにおいて、植民地主義を伴ったヨーロッパの商工業の拡張による労働力の不足に伴って、多くの中国からの労働者が東南アジアに流れた。移民の移住先はアジアのほかに、アフリカや太平洋地域にまで広がった。移民の発生は、中国内部の崩壊にも起因している。清朝末期には、アヘン戦争に始まって、清朝の存亡にかかわる再三にわたる群集蜂起が起り、19世紀中葉には、それがピークに達していた。また、清朝を揺らがすことになった「太平天国の乱（1850-1864年）」、「捻軍（反清武装農民の集団）の蜂起（1851-1868年）」、「義和団運動（北清事変）（1899-1900年）」によって、国内は更に混乱を極め、多くの中国人が海外に流れた。

清朝の政権に終止符を打った「辛亥革命（1911年）」後も、中国国内では、軍閥、革命、外国からの侵略、内戦というように、混乱が続き、1937年に日中戦争が勃発すると、更に国内は混乱し、国外への移民の大きな波が起こった。そして、1949年に中国共産党による中華人民共和国が成立にともなって、多くの国民党の残留が国外に流れた。この時期、海外に渡った華人は、都市部では巨大な華人コミュニティを形成し、経済活動を含めて華人社会全体をコントロールするまでになった。また、辺境の途上地帯に移民した華人は、タイ北部における国民党軍の残留のように、当地の政府の意向で中国共産党の進出を防ぐ役割を担う場合や、ミャンマー北部における同軍残留のように、政治的にも文化的にも台湾とは密接なつながりを保持しながら、現地に根付いて商業活動を行うなど、それぞれ独自の生活を築いている³⁾。

2-4. 1950年代以降：東南アジアを中心とする熟練労働者の需要、「新移民」の波

1950年代から1960年代にかけての移民は主に、辺境の発展途上地帯ではなく、都市部へと集中した。ま

た、この時期の移民は、従来主流を占めていた非熟練労働者ではなく、多種におよぶ熟練労働者の需要による移動であるといえ、その能力と労働力は、非熟練労働者のそれをはるかに上回っている。更に、近年は、グローバル化に伴い、中国への投資など、商業ベースの往来をはじめ、中国からの観光客や留学生を受け入れる国（シンガポールやマレーシアなど）も増加し、中国との交流が一気に進んでいる。特に、シンガポールでは高学歴で専門知識を有する中国人（香港人を含む）が労働することや、更には彼らの帰化が歓迎され、「新移民」が急増中である。また、中国からの新移民による「華源会」、香港人による「九龍会」という互助的な組織も成立し（特に後者はシンガポール政府による積極的な支持を得ている）、中国からの新移民によるコミュニティ形成に一役買っている³⁾。

3. 移民の適応パターン（1）：

土着との相互利用

（マレーシアとインドネシアの事例）

3-1. マレーシアの「カピタン」

華人移民が最も多いといえる19世紀において、東南アジア各地では、華人の相互扶助を目的とした地縁および血縁組織や、華人商人の利益を守るための商業組織などが次々と設立された。その一方で、華人移民による秘密結社も同時に成立し、華人を保護するという名目を持ちながら、華人社会に脅威を与えていた。一般的に、秘密結社は、同一の方言グループから形成されており、方言グループをコントロールしていた。当時、マラヤ（マレーシアの前身）では、秘密結社のリーダー格で才覚を持つ人物は、農園や採掘場などを支配し、労働者をコントロールするようになった。かれらは自然と、方言グループだけではなく、華人社会の中でもリーダー的存在として認められるようになっていった。

当時のマラヤでは、土着のスルタン（王）が、秘密結社の財力に目をつけるだけではなく、結社による保護を求めて、結社のリーダーと商業協定や政治的連盟を結ぶケースも増加していた。スルトンの信頼を得た結社のリーダーは、スルタンから「カピタン」を呼ばれる地位を授与された。結社のリーダーは、「カピタン」になることによって、スルトンの支配下にある採掘場などを傘下におき、事実上、その地域の事や物流を完全に支配するようになっていた。そして、結社のリーダーはスルタンを保護するだけではなく、それら

で得られた利益をスルタンに献上するというように、スルタン側も得るものは多く、かれらとスルタンの間には一種の相互利用が存在していた⁴。

その中でも最も卓越した「カピタン」であったといわれるのが、セランゴール州の海山秘密結社のリーダーであった葉亜来(ヤップ・アーロイ)である。葉は、1860年代に、土着の王位継承戦争にかかわり、スルタンのアブドル・サマドの王位継承のために一役買ったことで、スルタンから「カピタン」の地位を与えられた。その後、葉の支配とリーダーシップによって、クアラルンプールの錫鉱業および商業は飛躍的な発展をみせた。これによって、クアラルンプールは、商業都市として更に発展を続け、後に、マラヤの首都となるのである。スルタンだけ、あるいは、秘密結社のリーダーだけの力では、当時、クアラルンプールを含めたマラヤ各都市の発展はなかったといえる⁵。

マレーシアにおいて、華人社会での第一群の指導者は、このような「カピタン」であった。その後、植民地政府による実権が強固になってからは、徐々に「カピタン」制度は廃止されていったが、華人社会で巨額の富を得た商人や企業家が、華人社会でのリーダー的地位を「カピタン」から取って代わって、第二群の指導者となる20世紀初期まで、この「カピタン」制度は継続し、マラヤ発展の基礎を固めたのである⁶。

3-2. インドネシアの「アリ・ババ式連携経営」

一方、インドネシアでも、そのような土着と華人の相互利用が近年まで存在していた。その相互利用は、オランダ植民地時代の1870年から、1960年まで1世紀以上続いた土地政策により、インドネシアの公民権を取得していない華人が、農地を所有することができなくなったことに端を発している⁷。この土地政策が実施される以前は、東ジャワのスラバヤを中心とした地域で、裕福な華人移民は大規模な農園を所有し、イネやサトウキビの栽培を行っていた。しかし、土地政策実施以降、華人はやむなく農園への資金を製糖工場の建設などといった現代的な企業の運営へ移した。しかし、成功者は一部分であり、これにより没落した華人農園所有者は少なくなかった。

1950年代から1960年代にかけて、「アリ・ババ式連携経営」とよばれるスタイルの経営が出現した。「アリ」とは土着を、「ババ」とは華人を指すこの経営スタイルは、文字通り、土着と華人によって作り上げられたものである⁸。当時も、多くの華人(特に純血

の華人)はインドネシアの公民権を取得していなかったため、華人商人たちは、土着の商人と手を組み、土着の名義で得た土地にて、工場などを建設したりした。この「アリ・ババ式連携経営」が出現した当初は、華人は主に、サイドビジネスをもつ政界の重要人物と手を組むことが多く、ここから、「チュコン」をはじめとする、華人企業家と政界人物の癒着の土台が作られることになったのである⁹。

3-3. インドネシアの「チュコン」

現代的な企業の運営に携わるようになった華人は、多種多様にわたるビジネスに勢力を拡大し、彼らの企業も高度に多角化していった。1950年代から1960年代以降、多くの土着と華人との連合企業の所有権は、華人の手中にあり、「アリババ式連携経営」の対象になる土着は政界人物だけではなく、軍人にまで広がった。

特に、1950年代以降、頭角を現し始めた軍人は、積極的に華人との連携を望んでいた。地方の軍人は、ゴム、椰子、砂糖などをシンガポールに密輸し、そこで得られた利益を、軍資金として利用することを目的に、華人商人と積極的に手を組んだ。特に、ジャワの地方においては、福建系華人が長年、中小のビジネスに携わっており、地方軍人と手を組みやすい環境にあった。また、こういった華人商人のほとんどが、中国語教育を受けた純血華人であり、シンガポールなど、華人が多い地域とはビジネスや資金調達のためのネットワークをすでに持っており、当時、シンガポールへの密輸は難しくなかったのである。

1967年に大統領に就任したスハルトも、大統領就任以前、ジャワ軍の指揮官であった際に、林紹良(スドノサリム)をはじめとする複数の華人商人と手を組んでおり、大統領就任以降も、そのビジネス関係を継続させていた。これは、その後、林がインドネシアで最大の財閥となるサリム・グループを築き上げる土台となった。1970年代、このように、軍と密接な関係を持っていた華人商人は、「チュコン」の称号を与えられ、いくつかの分野で活躍していた。1980年代末期から、原料価格の暴落によって、特にインドネシアで主要な輸出品目であった石油は大きな打撃を受けたため、政府は石油に変わる代替の輸出品を増加する政策をとったことから、紡績業や靴製造業をはじめとする製造業が発展し、輸出品も多様化した。それら大企業のほとんどが華人によるものである¹⁰。

林にかんして言えば、1980年代に中亜銀行を設立

し、サリム・グループを国内屈指の財閥まで成長させた。当然ながら、スハルトの支持なくしては、サリム・グループは、ここまでの発展をなしえることはできなかったであろう。しかしながら、1998年に、経済危機の悪化によってスハルト退陣を求める暴動が発生し、状況は一変した。林をはじめとする、スハルトやその傘下にある軍部と関係が深かった華人商人は、スハルト失脚と同時にその勢力を失うこととなったのである¹¹⁾。林の中亜銀行の株式の大半は、外資系企業に買収され、サリム・グループも現在、大きな負債を抱えている¹²⁾。林は、福建省福清出身の華人であり、シンガポールの福清会館の名誉顧問をしているが、名ばかりではなく、主要行事のたびにシンガポールへ飛び、イベントに出席している。1998年の暴動以来、シンガポールに滞在することが多くなった林は、引き続き頻繁に福清会館には顔を出していた¹³⁾。インドネシアで、このような華人組織が容認されていない状況下において、海外の血縁あるいは地縁組織に加入し、華人のネットワークを築くことは多く、インドネシア以外でも、ミャンマーなど、政府による制限が存在する地域の華人企業家によく見られるケースである。

そういったケースばかりではなく、国家間の国交樹立などのために活躍し、国家が国際社会でその地位を確立するために貢献した「チュコン」も存在する。その代表例が、インドネシア国籍で、シンガポールの永住権を持つ唐裕（トン・ジュウ）である。唐は1926年にインドネシアで生まれ、8歳の時にシンガポールにいる兄を頼って来星、華語による教育を受け、18歳で海運業に従事するようになった。1950～60年代、製油業を本格的に開始したばかりのシンガポールで、唐はシンガポールとインドネシア間の石油の輸送を手がけた。そして、1957年には唐の経営するTUNAS社が、インドネシア国家石油公社の駐シンガポール総代理に指定されるまでとなった。1950年代後半から1960年代にかけて、同社は全盛を極め、多い時には一時に200隻のタンカーを所有し、唐はシンガポールの海運王とも称えられた。唐は1945年、インドネシアのスカルノ政権樹立に際して軍部に物資を調達し、政権の樹立を助け、その後のビジネスを通してスカルノ大統領と深いつながりを築き、ビジネスにおける自らの地位を確かなものとした。1960年代、唐は、中国銀行シンガポール支店の開設を積極的に支援し、中国のシンガポール進出の突破口を開くことに貢献した。また、当時、シンガポールとインドネシアでは、政変が立て続けに起こり、シンガポールは1965年に

マレーシアから分離独立、同年インドネシアでは9・30事件（詳細は次節）が発生し、スカルノ政権が揺らぐことになった。そのような波瀾に満ちた時代の中で、唐はインドネシアの政府高官に対し、シンガポールとの国交樹立を積極的に助言し、1967年、両国の間で国交が結ばれた。インドネシアでは同年、スカルノからスハルトへ政権が交代したが、シンガポールとの国交樹立やインドネシアの経済発展の立て役者である唐は、失墜するどころか、スハルト新大統領からも信望を得たのである。その後、唐は、1990年のインドネシアと中国の国交回復、その直後のシンガポールと中国の国交回復において、両国と中国の要人との「根回し工作」で、陰ながら大きな役割を果たしたのである。1960年代以降、唐は、積極的な中国への支援や中国でのビジネスを通して、李鵬や朱鎔基など中国の要人からも信頼を得てきた。唐のそういった人脈と信頼関係が、インドネシアおよびシンガポールの指導者から一目置かれ、それが三国の外交関係にも大きく役立ったのである¹⁴⁾。

以上の「カピタン」、「アリ・ババ式連携経営」および「チュコン」に見られる華人と土着との関係についていえば、華人と土着は同化するわけではなく、共生というよりもむしろ相互利用しながら生存しているといった関係であるといえる。相互に利用し合っているため、双方ともに得られるものは多く、これらの関係が、国家の発展に寄与した部分は非常に大きい。特に、「チュコン」についていえば、一般的に、林詔良を例とするように、時の政治権力が存在する間は安泰であるが、政変によって反対派が政権を握ると失墜するケースがほとんどであった。こういった関係は、どちらかに利用価値がなくなれば、あるいは、土着の権力者が失脚すれば、華人は全てを失ってしまう危険をはらんだ関係であるともいえるのである。その中で、唐裕のように、国家間の外交関係に尽力したケースは、居住国への最も大きな貢献のひとつであり、いわば特別のケースであるといえるだろう。こういった関係は、華人（特に商人）が、居住地に適応するための重要な選択肢の一つだったのである。

4. 移民の適応パターン (2) :

土着との同化（マレーシアおよびインドネシアの「ペラナカン」を例として）

東南アジアの一部の地域では、華人と原住民との通婚による同化が進み、混血文化が生まれた。マレーシ

アやインドネシアでは、こういう混血児を「ペラナカン (特に男女を区別して呼称する場合は、男性はパパ、女性はニョニヤ)」と呼ばれている。また、フィリピンでは、先住民とスペイン人の文化をあわせ持ったメスティソと呼ばれる混血児が生まれ、かれらは居住地で他民族と比較的平和に共生していた。かれらはそれぞれ、華人のものとは別の、独自の融合文化を作り出してきた。本節では、「ペラナカン」について取り上げる。

マレーシアの「ペラナカン」の起源は、15世紀のマラッカ王国時代にまでさかのぼることができる。当時、福建省からの移民を多く受け入れたマラッカはマラヤにおける最初の華人居住地となった。インドネシアでも、19世紀中葉以前から多くの華人移民が流入し、巨大な華人居住地が形成された。当時の移民の大半は単身の男性であり、原住民の女性や、華人と原住民との間に生まれた混血児と通婚するケースが多かった。かれらの子弟は「ペラナカン」と呼ばれ、現地の言語に精通し、現地の文化を積極的に受け入れたが、中国の伝統的な価値観も保持していた¹⁵⁾。

18世紀から19世紀にかけてのマラヤでは、商業界や専門的な分野で、「ペラナカン」はその才覚を現した。マラヤでは、イギリス人がペナン (1786年) およびシンガポール (1819年) にて政権を確立すると、両地域の経済は急速に発展した。マラッカの「ペラナカン」は、その機に乗じて両地域に移り、それらの地域でも活躍した。また、かれらはマラヤ全域において、サトウキビの栽培や、製糖業に従事したり、錫鉱業やゴムの栽培にも着手したりして、それぞれの分野で成果をあげ、土着の王から認められ、「カピタン」としての地位を獲得するものも現れた。植民地政府が「カピタン」制度を廃止してからは、英語やマレー語に精通する「ペラナカン」は、植民地政府の機関にて官員として採用される機会が増加した。

1900年、マラヤでは、イギリス植民地政府によって、「英籍海峡華人公会」が設立された。メンバーのほとんどが、英文教育を受けた専門職従事者や企業家である「ペラナカン」によって占められていた。かれらは、マレーシア華人社会において、第三群の指導者となった。メンバーの中でも代表的な人物は陳禎祿 (タン・チェンロック) であり、公会の指導者を務めたほか、後にマレーシアで成立した華人政党「馬華公会」の初代会長に就任するなど、華人社会におけるリーダー的役割を果たした¹⁶⁾。

一方、インドネシアでは、20世紀初頭、「ペラナカ

ン」によって、純血華人と同様に、互助組織である「公会」や「会館」が設立された。組織内での使用言語は、早期においては父祖の地からの福建語が使用されていたが、後にマレー語に取って代わられた。また、華人による華文学校の増加に対抗して、オランダ植民地政府によって、「荷華学校 (Holland-Chinese School)」が設立された。「ペラナカン」のエリートの子弟の多くは、オランダ語を教学用語とする「荷華学校」へ進学したため、オランダ語が「ペラナカン」エリートの言語となった。中でも優秀な「ペラナカン」の子弟は、オランダの大学に進学する機会を得る事ができ、帰国後は、医師、弁護士、薬剤師やエンジニアなどの専門職に従事することとなった。植民地政府も、オランダ語教育を受けた「ペラナカン」を積極的に官員として採用した。こうして、「ペラナカン」の中でもエリート層は、オランダ語教育を受けたものによって占められることになった¹⁷⁾。

「ペラナカン」の文化は、中国文化と土着の文化の融合であるといえる。言語について言えば、エリート階層は宗主国の言語に精通しているが、一般的には、家庭内ではマレー語 (インドネシア語) を使用し、親族に対する呼称や料理の名称に福建語の単語を使用するほかは、中国語は話さない。マレーシアの「ペラナカン」女性の服装は、マレー系のスタイルを基調としたものではあるが、中国的な色彩や模様をあしらったものが多い。インドネシアの場合は、バティックと呼ばれる土着のろうけつ染めの服装が好まれて使用されている。「ペラナカン」の歴史は長いため、彼らによる文学も地位を確立していた。インドネシアの場合、独立前は、華人マレー語 (ムラユ・ティオンファ) と呼ばれる日常生活で使用される言語によって書かれていたが、独立後は、それは標準インドネシア語に取って代わられた¹⁸⁾。

また、「ペラナカン」の特色が現れている宗教の中に、孔子を信仰する「孔教」がある。ジャワの孔教の歴史は古く、1899年にジャワのスラバヤに孔子の神位を祀った廟が建立されたのを最初に、その後、華人組織である中華会館 (中でも「ペラナカン」のメンバー) による支持や、熱心な信者によって孔教はジャワ各地に広まった。現在、「孔教会」という組織が設立され、孔子学説を宣揚し、孔教を広めることに努力している。興味深いのは、その主要メンバーの大半が「ペラナカン」によって占められ、具体的な活動内容は、インドネシア語による集会の開催、出版物の刊行、宣教であり、それらの活動により、非華人からも

支持者を集めている。孔教会は組織化されており、教義および一神論を有することから、その形態はキリスト教やイスラム教に類似している。これらの点だけを見ても、すでに中国にある孔教とは異なるものになっており、インドネシアに同化された新しい形の孔教であるということが出来る¹⁹⁾。

こういった「ペラナカン」は移民の歴史が生んだ副産物であるといえる。かれらのアイデンティティは、それぞれの背景によって異なり、華人の血を引いている、あるいは華人であると認識しているもの、華人の意識が希薄なものなど、様々であるが、一般的には華人と区別して、「自分はペラナカン（ババ、ニョニヤ）である」と認識しているものが多い²⁰⁾。マラヤやインドネシアでは、「ペラナカン」が、積極的に現地や宗主国の言語を学ぶことによって、居住国での地位を確立していったことが、共通点としてあげられる。居住地の文化、言語や習慣を取り入れ、同化することによって、比較的容易に居住地に適応していったのである。

5. 移民の適応パターン (3) :

土着との共生（ジャワの純血華人を例として）

インドネシアでは、華人は、主にジャワに居住する純血華人（以下華人）、「ペラナカン」、そして、ジャワ以外の島に居住する華人に大別される。本節では、ジャワ華人について取りあげる。ジャワの華人については、近年は、徐々に同化もみられるようになってきており、純血の割合は、1960年代の時点で、ジャワ華人全体の40%となっている。

19世紀末期になると、それまでの男性の単身者による移民が大半だった状況から、妻帯で移民する華人が増加し、華人移民の様相も変容した。そういった妻帯の移民は、特にジャワに多く、移民は同化せずに、ジャワにて華人の家庭を築いた。かれらは、中国の言語、服装、習慣を保持し、代々中国文化を継承することに努めた。とりわけ、現地生まれの子女に対しては、中国の出身地へ送り、教育を受けさせるなど、中国との紐帯を強めるような教育を行った。

かれらはまた、現地で、中国語学校の設立、華人義山（墓地）の造営、中国廟の建立、地縁・血縁会館の設立、中国語紙の発行、中国からあるいは現地の中国語による出版物の普及などを積極的に行い、華人文化を維持することにつとめた。こういった純血華人がなくなったものに対して、「ペラナカン」はさほど興味を

抱いていなかったため、華人と「ペラナカン」の接点も多くはなかった²¹⁾。当時、華人の多くはチャイナタウンに居住していた。

また、当時は、他の東南アジア諸地域の華人社会と同様に、華人にとって方言グループのアイデンティティは非常に重要であった。多くの職業は、一つの方言グループによって独占されており、他の方言グループの参入は難しかった。1950年代までは、華人の方言グループによって、75~85%の大企業が独占されていた。彼らの大半は純血華人で、それらの多くが、中国生まれ、或いは中国語教育を受けたものであった。多くが中国語を流暢に話し、商業界では、「ペラナカン」をはるかにしのぐ勢力を有していた。インドネシア華人の商業文化は、ほぼ完全にこういった純血華人によって作り上げられたものであるといっても過言ではない。その中から、後に「アリ・ババ連携経営」にかかわるものや、「チュコン」として活躍する華人商人が生まれたのである。

教育についていえば、戦前は、他の東南アジアの華人社会の状況と同様、中華民族主義を涵養する中国のカリキュラムに従った華文学校が数多く設立され、華文学校教育は発展を続けていたが、インドネシア独立後、状況は一変する。1957年に、国民党系の学校は、強制的に閉鎖されることになり、これによって、1800校あった華文学校数が、510校にまで激減した。しかし、12万人の児童・生徒はなおも華文学校で学び続けた。華文教育に更なる打撃をあたえることになったのが、1965年9月30日に起こった9・30事件である。同事件は、軍事クーデターをきっかけとする反共産主義暴動であった。翌年、反共産主義暴動が大規模な排華運動へと発展し、スマトラ島北部やカリマンタン島の農村に居住する華人は出国を迫られた。これによって、中国とインドネシアの国交は断絶し、すべての華文学校は閉鎖に追い込まれたのである²²⁾。華文学校の児童・生徒はインドネシア語学校への転入を余儀なくされた²³⁾。このようないきさつから、現在、インドネシア華人の中で、中国語を話せる人のほとんどが50歳以上という状況である。かれらは、1960年代以前に、華文学校を卒業した人たちである。

9・13事件が起こった1960年代、インドネシア政府は、華人を含めた少数民族に対して、同化政策を本格的に実施した。華人に対しては、中国文化を消滅させることを目的とし、華人は中国語名を使用せず、インドネシア名を使用することを強制した²⁴⁾。また、更に、地縁・血縁による華人組織はもとより、「ペラナ

カン」による国籍協商会さえも解散に追い込まれた²⁵。

公民権についていえば、同じく、1960年代に大きな変動があったといえる。オランダ植民地時代は、植民地政府が出生地主義と取っていたため、インドネシアで生まれた華人は、必然的にオランダ植民地政府から公民権を与えられた。その一方で、中国は、血統主義に基づいて、海外に居住する中国人にも国籍を与えていたため、当時のインドネシアでは二重国籍の華人が非常に多かった。インドネシアが1940年に独立してからは、新政府は二重国籍を認めなかったため、華人はそのうちの1つを選択せざるを得なくなった。特に、1960年および1961年の間に強制的に選択が迫られることになると、一部の華人が公民権を申請するにとどまり、その後、1980年代までは、なおも60%以上の華人が、中国国籍を有していた。中国国籍を保持する華人のうち、一部の華人は自ら中国へ渡ったが、多くはインドネシアに残り、中国国籍を保持したまま永住権を申請することとなった²⁶。

1970年代後期になると、スハルト大統領は、中国との関係改善を希望するようになり、華人に対する制限も緩和する事を決定した。公民権についても同様で、公民権未取得の華人が公民権を取得する際の手続きを簡略化し、費用も下げ、多くの華人が公民権を取得しやすいようにした。また、同時に、これまで禁止していた中国廟を修復することや、地縁・血縁組織を復活させることなども、条件付で許可した。現在は、約10%の華人がまだ公民権を取得していない。かれらのほとんどが中国生まれの高齢者である²⁷。華人の伝統行事についていえば、植民地時代は、植民地政府が華人に対してさして制限を加えなかったため、春節、端午節、中元節、中秋節などといった華人の伝統行事は盛大に祝われていた。しかし、インドネシア独立後は、政府は、こういった伝統行事はすべて宗教行事ではないという理由から、公共の場での華人の儀式や行事のイベントなどの実施を禁止し、中国廟と家の中でのみ実施する事を許可した。この制限はスハルト大統領時代も継続した。

その後、1998年に起こった暴動によって、スハルト大統領が退陣してからは、華人を取り巻く状況は大きく変化した。2000年、ワヒド大統領は、これまで華人の宗教や民俗活動について制限を設けていた「1967年第14号大統領政令」を撤回したことにより、華人が公共の場でも、世界の華人と同様に春節を祝う事ができるようになった²⁸。更に、中国との関係

に重点をおくメガワティ大統領は、2002年の春節に、孔教総会を訪問し、その場で、2003年以降、春節を正式にインドネシアの祝日とすることを発表した²⁹。これは、インドネシア華人にとって、57年間待ちこがれた朗報であるといえる³⁰。メガワティ大統領は、そのほかにも、華文教育の復興という快挙をなし遂げた。現在は、華人による華文学校、家庭教師による中国語の補習も次々と出現し、インドネシア語の学校でさえも、中国語コースを設けるようになっている。中国語の教学レベルを高めるために、直接、中国大陸の高等教育機関に連絡を取り、教師や学生の交換プログラムを提案する教育機関も出現している。このような動きは、政府にも見られる。2001年、インドネシア教育省(青年・体育・校外教育司)と、広東省海外交流協会および広東教育国際交流協会が、広州市にて、華文教師訓練コースの合同実施という協議に調印した。具体的には、広東省から、大学教員による中国語の専門家グループがインドネシア各地に派遣され、華文教師のトレーニングを行うというもので、コースを終了し、試験に合格したものが、中国とインドネシア双方による修了証書を受け取るのと同時に、インドネシアでの華文教師の資格を得ることができるといったシステムだ³¹。

現在、インドネシアでは、中国語がブームになってきており、最も重要な言語として、英語と肩を並べるようになっている。中国の改革開放政策やメガワティ大統領の親中国政策によって、ここ数年、中国とのビジネスは盛んになってきており、中国語を話せる人材が必要とされているためである。現在、熱心に中国語を学ぶ人たちは、中国文化に興味を持っているわけではなく、まして、中国伝統文化を継承したいと考えているわけではないのである。

ジャワの純血華人は、移民当初、中国の言語、服装、習慣を保持し、代々中国文化を継承する事に努め、他民族との同化を受け入れなかった。インドネシア独立後も、政府による公民権取得やインドネシア名への改名への要請、伝統行事の実施に対する制限、ひいては華文学校の廃止などによって、華人はインドネシアへの完全な同化を求められたが、華人の多くは、その状況に耐えながら、同化を受け入れることをしなかった。そして、近年は、華人に対して行われてきた数々の制限は緩和され、現在ではむしろ、中国語教育が奨励され、華人伝統行事も承認されるようになり、土着のインドネシア人が中国語を学んだり、華人伝統行事に参加する姿も見られるようになっている。ジャ

ワの純血華人は、大別すると以上のような保守的な立場から排斥される立場を経て他民族と共生する立場に変容過程にある。現在の「共生」という状態は、インドネシア華人のみならず、世界に散らばる（同化していない）海外華人が、他民族とのよりよい関係を築いていく上でめざすものであることは間違いないであろう。

6. おわりに

海外華人の歴史および移民の適応パターンについて述べてきたが、華人移民の適応パターンは大別して「土着との相互利用」、「同化」、「共生」といった3種類のパターンに分けることができる。その中で、「カピタン」、「アリ・ババ連携経営」および「チュコン」に代表される「土着との相互利用」については、華人と土着は同化するわけではなく、共生というよりもむしろ相互利用しながら生存しているといった関係であり、相互に利用し合っているため、双方ともに得られるものは多く、これらの関係が、国家の発展に寄与した部分は非常に大きい。こういった関係は、華人（特に商人）が、居住地に適応するための重要な選択肢の一つとなった。特に、華人の経済活動に対して制限を加えている国や地域でこのようなケースが見られる。

また、「同化」を代表する「ペラナカン」は移民の歴史が生んだ副産物であるといえる。マレーシアやインドネシアでは、「ペラナカン」が、積極的に現地や宗主国の言語を学ぶことによって、居住国での地位を確立していったことが、共通点としてあげられる。居住地の文化、言語や習慣を取り入れ、同化することによって、比較的容易に居住地に適応していくパターンである。

同化をしない華人が、他民族とうまく「共生」できることは容易なことではない。本研究で取り上げたインドネシアの純血華人の事例のみならず、多くの国や地域において、過去には、排華運動をはじめとする華人にとって不幸な事件がしばしば起こっていた。とりわけ、近代では、居住国政府による厳しい同化政策によって、多くの華人が居住国へ同化を強制されたり（インドネシア、ミャンマーなど）、他民族との軋轢などによって、種族暴動や排華運動が発生し、多数の人びとが殺害されたり（マレーシア、インドネシア、ミャンマー、カンボジア、ベトナムなど多数）、華人の経済活動や教育活動に制限が加えられたり（タイ、インドネシアなど多数）といったことは少なくなく、そ

れぞれの地域で、多くの華人が犠牲になってきた。また、現在においても、一部の居住地では、先住民を優遇する政策で、華人の進学や就職にも制限が行われていたり、中国語学校や中国語の出版物に制限が加えられたり、華人の生活がなおも制限されている。その一方で、華人が国民国家の一員として他民族と平等の権利を享受できている居住地もある。ジャワの純血華人も、現在では承認される立場となり、本当の意味での他民族との「共生」が可能になりつつある。

グローバル化が更に進み、今後、多くの国や地域で、「新移民」も更に増加することであろうし、多種多様な他民族との関係がうまれるであろうと予想される。このような状況の中で、今後、華人社会も更に複雑化し、異なった適応パターンが生まれてくるであろう。その中で華人を含めた多民族がよりよい社会を築くためにいかに多民族を承認し、共生していくかが重要なカギとなることはまちがいないであろう。

注

1) 華人について語る際に、よく議論されるのが「中国人」、「華僑」、「華人」といった呼称についてである。一般的には、海外に居住している（主に職業を持ち、定住している状態の）中国国籍所有の中国人で、居住地への永住を目的としているものも含め、かれらは「華僑」と呼ばれている。

一方で、いわゆる中国系アメリカ人、中国系シンガポール人などを例とするように、海外に居住し、居住国の国籍をすでに取得しているのが「華人」と呼ばれている。特に、後者は、中国人の血を引いてはいるが、中国国籍を所有しておらず、中国に対する政治的忠誠心や国家アイデンティティを持っているわけではない。さらに、後者の中には、他民族との通婚などによって、完全に居住国へ同化し、自らが華人であるというアイデンティティさえも有していないものも存在しており、それらを「華人」と呼べるかということも微妙なところである。

華人を取り巻く環境、歴史的背景や、地域の条件が異なることから、ひとつの時代を境に、「華僑」から「華人」へと、境界線を引くことは非常に困難ではある。よって、本研究では、「華人」の用語に統一して使用する。

2) 以上の部分（2-1～2-3）については、以下の書籍を参照した：

潘翎主編、崔貴強編訳、『海外華人百科全集』、三聯書店（香港）有限公司、1998年、46-59頁。

Jennifer Cushman & Wang Gungwu, eds., *Changing Identities of the Southeast Asian Chinese since World War II*, Hong Kong: Hong Kong University Press, 1988.

Leo Suryadinata, ed., *Southeast Asian Culture: The Socio-Cultural Dimension*, Singapore: Times Academic

- Press, 1995.
- Leo Suryadinata, *Chinese and Nation-Building in South-east Asia*, Singapore: Singapore Society of Asian Studies, 1997.
- 3) 吳偉明・合田美穂「シンガポールにおける日本の社縁文化—日本人会と九龍会との比較」, 中牧弘允・ミッシェル・セジウィック編『日本の組織 社縁文化とインフォーマル活動』, 東方出版, 2003年, 99-126頁。「*亜洲週刊*」2004年4月25日。
- 4) 宗郷会館が、華人社会の“正”の側面であるとするなら、その一方で、秘密結社は“負”の側面といえる。中国からの移民のほとんどは、仕事や住居などでの扶助を求めて宗郷会館に入会し、その保護を受けていたが、同時に秘密結社に加入する華人も少なくなかった。秘密結社では、『三国演義(三国志)』中の英雄である関羽や劉備、張飛などを守護神としているものが多く、入会儀式もそれらの面前で行われた。また、秘密結社は宗郷会館と同様に、華人社会の葬祭を取り仕切ることも仕事の一部としていた。当時、多くの華人は、秘密結社に入会することによって、自らを“保護”してもらっただけではなく、同時に闘争に参加することで結社のメンバーや結社自身をも“保護”したのである。
- 5) 潘翎主編, 崔貴強編訳, 『海外華人百科全集』, 三聯書店(香港)有限公司, 1998年, 172-174頁。
顔清渙著, 陳劍紅訳「新馬華人社会的階級結構與社会地位流動(1800-1911)」および, 粟明鮮訳, 「十九世紀新馬華人社会中的秘密会社與社会結構」, 『海外華人史研究』, 新加坡亞洲研究学会, 1992年, 149-167および, 179-197頁。
- 6) 同時期, インドネシアにおいても, 「カピタン」は存在しており, 主に「ペラナカン」の有力者が任命されていた。
- 7) この土地政策の目的は, 土着を保護するためのものであり, 華人が土着の耕地を占領したり, 騙し取ったりする事を防ぐために実施された。インドネシアの公民権を持つ土着のみが, 耕地を所有することができ, 華人を含めた外来のアジア人は, 都市に居住することを強いられた。
- 8) 潘翎主編, 崔貴強編訳, 『海外華人百科全集』, 三聯書店(香港)有限公司, 1998年, 159頁。
Leo Suryadinata, “Chinese Economic Elites in Indonesia: Recent Developments”, *The Culture of Chinese Minority in Indonesia*, Singapore: Times Books International, 1997, pp 25-54.
- 9) 当時のマレーシアにおいても, 華人の商業活動が制限されており, 華人と土着との「アリ・ババ式連携経営」が生まれた。
- 10) 潘翎主編, 崔貴強編訳, 『海外華人百科全集』, 三聯書店(香港)有限公司, 1998年, 159-160頁。
朱炎『華人ネットワークの秘密』, 東洋経済新報社, 1995年, 52-53頁。
白石 隆『新版インドネシア』, NTT出版, 1996年, 169-176頁。
- Leo Suryadinata, “Chinese Economic Elites in Indonesia: Recent Developments”, *The Culture of Chinese Minority in Indonesia*, Singapore: Times Books International, 1997, pp 25-54.
- 11) 当初は, スハルト退陣を要求する暴動であったのが, スハルトと癒着していた華人商人もその攻撃の対象となり, 更には一般市民を含めた全華人も犠牲になった。同暴動については, 中国和世界雑誌社編集部『華裔的非情』, 中国和世界雑誌社, 1998年の前文を参照にした。
- 12) 『*亜洲週刊*』, 2002年10月7日。
- 13) 筆者は, シンガポール滞在中の1996年~2000年までの期間, シンガポール福清会館での行事にて, 参与観察を行う機会を得たが, 中でも比較的重要な春節の行事などには, 林は必ず出席していた。
- 14) シンガポールに居住する唐裕は, 現在, シンガポールの安溪会館主席, 中華総商会理事, 海星中学校および工商小学校等の学校役員を務めるなど, シンガポールの華人社会にも多大な貢献をしている。唐裕にかんする記述は, 筆者がシンガポール滞在中の1996年~2000年の期間に, 数回にわたって唐に対して聞き取りを行った内容をもとにして記述したものである。
- 15) 一般的に, 土着(マレー人やインドネシア人)の価値観は, 儉約しない, 勤労働勉ではない, ビジネスに興味がない, 楽な生活を享受することや確実性を重視するといったものであるといわれている。一方で華人は, 儉約に努め, 富や名誉を重視し, ビジネスチャンスを見逃さず, 洞察力が深いといったことが価値観の特徴としてあげられる。
- 16) 潘翎主編, 崔貴強編訳, 『海外華人百科全集』, 三聯書店(香港)有限公司, 1998年, 172-174頁。
萩原宜之『ラーマンとマハティール プミプトラの挑戦』, 岩波書店, 1996年, 1-18頁。
- 17) 潘翎主編, 崔貴強編訳, 『海外華人百科全集』, 三聯書店(香港)有限公司, 1998年, 164-165頁。
- 18) Leo Suryadinata, “The Chinese Minority in Indonesia: Recent Developments” and “Peranakan Literature in Indonesia”, *The Culture of Chinese Minority in Indonesia*, Singapore: Times Books International, 1997, pp 7-20 and 197-203.
- 19) 潘翎主編, 崔貴強編訳, 『海外華人百科全集』, 三聯書店(香港)有限公司, 1998年, 162-163頁。
Leo Suryadinata, “Chinese Minority Religions After World War II”, *The Culture of Chinese Minority in Indonesia*, Singapore: Times Books International, 1997, pp 159-184.
- 20) シンガポールの場合は, 身分証明書に記録するための民族区分に「ペラナカン」は設けられていないため, 「ペラナカン」は華人として登録される。また, 英語と母語による2言語教育の過程で, 「ペラナカン」は華語(中国語)を母語として履修する。そういった要因により, シンガポールでは, 自身を華人であると認識している「ペラナカン」も多い。
- 21) 方言群を超えた組織であるジャカルタの「中華会館」

は例外で、ペラナカンも積極的に参加していた。

- 22) Leo Suryadinata, "Indonesian Chinese Education: Past and Present", *The Culture of Chinese Minority in Indonesia*, Singapore: Times Books International, 1997, pp 77-102.
- 23) 当時、ジャカルタの華文小学校の4年生であったH氏の話によると、保守的な思想を持つ純血華人の家庭に育ったH氏およびその兄弟は、インドネシア学校へは転入せず、華人の家庭教師について学びながら、中学教育までの学習内容を終えた。当時の保守的な華人は、子弟をインドネシア人と接触させず、中国人としての価値観や中国伝統文化を守る事を第一に考えていたという。そのような背景で育ったH氏は、華人以外の民族と結婚するということは一切考えておらず、その後、シンガポール人と結婚し、シンガポール国籍を取得した。(2002年6月、シンガポールにおけるH氏への聞き取りによる。)
- 24) ジャワのスラバヤに居住する純血華人の保守的な家庭に育ったO氏は、インドネシア名への改名という圧力の中でも、一切それに従わなかった。民族意識が強い華人の中で、O氏のように断固として改名しなかった華人は多くない。(2003年3月、香港にて、インドネシア人のO氏への聞き取りによる。)
- また、現在、当局は、華人がインドネシアに同化する意思があるかどうかということを示すための指標として、インドネシア名の有無を重要視している。例えば、インドネシア公民権を取得している華人に発給される身分証に、インドネシア名であるかどうかの暗号が記されており、それによって、華人に対する待遇を変えるという。
- 25) 潘翎主編、崔貴強編訳、『海外華人百科全集』、三聯書店(香港)有限公司、1998年、166頁。1970年代に、華人への制限が緩和されたことにより、条件付で、華人組織を再開することができるようになった。
- 26) 国籍選択は、華人の人生を大きく変えることになっ

た。1960年に、インドネシアで国籍の選択を迫られ、中国国籍を選択したX氏の話によると、ジャワで比較的裕福な生活をしていた純血華人であるX氏の家族は、全員が中国国籍を選択し、一家で中国へ渡った。その後、X氏は大学へ進学したが、おりしも、文化大革命が起こり、海外華僑で裕福であったという背景を持つX氏およびその家族は批判の対象となった。文革時代に辛酸をなめ尽くしたX氏は、インドネシアへ戻ることを切に希望したが、中国国籍しか保持していない立場では不可能であった。その後、専門職についている中国人と結婚し、中国国内で生活を続けていたが、1980年代に、シンガポール政府が専門的知識を持つ人材を呼び込む政策を打ち出した際に、X氏の配偶者はシンガポールに招聘されることとなった。そして、家族全員でシンガポールに渡り、H氏はシンガポールで永住権を取得後、ほどなくシンガポール国籍も取得した。インドネシアを離れて30年以上経てから、X氏は再び故郷インドネシアの土を踏むことができたのである。(2000年7月、シンガポールにて、シンガポール人X氏へのききとりによる。)

- 27) 潘翎主編、崔貴強編訳、『海外華人百科全集』、三聯書店(香港)有限公司、1998年、165-166頁。
- 28) 「亞洲週刊」2002年8月26日。
- 29) 「亞洲週刊」2003年2月3日。
- 30) ワヒド、メガワティ両大統領に続き、2004年の大統領候補者の一人であるウィラントも、2004年の春節に、華人組織のイベントに出席し、中国語で出席者に挨拶をするなど、親華人の態度を取っている。ウィラントは、1998年の暴動時に、国防および治安における最高責任者の地位にあったにもかかわらず、暴動に対して適切な措置をとらなかったことから、華人の不満を買ったいきさつがあるだけに、この親華人的な態度については、選挙目的であると冷やかな見方をされている。(「亞洲週刊」2004年2月22日。)
- 31) 「亞洲週刊」2004年5月9日。